

就園児の母親による保育者への相談行動とその満足度を規定する要因 — 子どもの行動特性上の悩み相談に注目して —

高城 紀子・今城 周造

Factors influencing help-seeking behaviors of mothers and their satisfaction with preschool teachers about children's behavioral problems

Noriko TAKAGI and Shuzo IMAJO

Factors affecting help-seeking behaviors of mother and their satisfaction with preschool teachers about children's behavioral problems were investigated. Participants were mothers with children aged three to six years ($N = 211$) who completed a questionnaire. Results of covariance structural analysis indicated the following. (1) Mothers with less child rearing competence had more concerns about their children's behavior, and the degree of concern increased mother's help-seeking behavior from preschool teachers. (2) Appropriate counseling by preschool teachers including having a professional perspective and giving practical suggestions reinforced mother's satisfaction with their help-seeking. The implications of these findings and recommendations for increasing the effectiveness of child-rearing counseling by preschool teachers are discussed.

Key words : mother (母親), preschool teacher (保育者), help-seeking behavior (相談行動)
child rearing counseling (育児相談)

問題と目的

子育て中の現代の母親は、多くの情緒的・道具的サポートを必要としているにもかかわらず、すべての母親が必要な援助要請を行っているとはいえない。子育てを支援する人数が多い程、また支援への満足度が高い程、育児ストレスの軽減に寄与するとされ、地域でも様々な育児支援提供への取り組みがされている。しかしながらそれらの支援をうまく活用する母親と活用しない、あるいはできない母親がいるのが現状であり、母親のメンタルヘルスの維持、さらには児童虐待の背景の観点からも、育児中の母親のサポート希求は重要なテーマであると考えられる。

育児の悩みとサポート希求先

ソーシャル・サポートはストレスの低減に対して一定の効果があると言われており、育児期にある母親の育児ストレスに対しても、ソーシャル・

サポートによる緩衝効果が明らかにされている(金岡, 2011; 坂田・成瀬・田口・村嶋, 2014; 佐藤・菅原・戸田・島・北村, 1994; 渡辺・石井, 2009)。母親は期待するサポート内容によってソーシャル・サポート源を使い分けており、また子どもの発達的变化に伴い重視されるサポート源も変容すると考えられる。笠原(1999)の3歳までの子どもをもつ母親を対象にした研究によれば、母親の悩み別に理想の相談相手が異なっており、就園前後の子どもの行動や性格についての悩みに対しては、園の先生を理想の相談相手として選択する保護者が多いことが明らかになった。一方、日下部・久保(2013)は子どもの発達的变化に伴う母親の育児ストレスの変化にも着目し、1歳半児では子どもの多動や母親の行動が制限されることなどがストレス源として上位にあがっていたのに対して、3歳児の母親ではぐずるとなだめにくい、聞きわけがないなどの関わりに

くさが増えてくることを明らかにした。

そこで本研究では、母親の育児ストレスの内容を就園時期の子どもの行動特性上の悩みに特定し、サポート希求先としては就園児の母親の一番身近な専門家と考えられる園の先生（保育園保育士ならびに幼稚園教諭、以後保育者と表記）と設定した。育児中の母親が子どもの悩みを他者に相談する相談行動は援助要請行動の一形態であると考え（永井・新井, 2007）、援助要請行動の生起がどのように規定されるかについて、これまでの援助要請行動研究で明らかになっている知見や枠組みを用いて検討したい。

援助要請

援助要請行動は臨床心理学の領域において「情緒的または行動的問題を解決する目的でメンタルヘルスサービスや他のフォーマルまたはインフォーマルなサポート資源に援助を求めること」（Srebniak, Cause, & Baydar, 1996）と定義され、メンタルヘルスの問題に焦点をあてた研究がされている。援助要請を行う際の認知的枠組みである被援助志向性について、水野・石隈（1999）は米国での研究を概観し、影響因として1) デモグラフィック要因との関連、2) ネットワーク変数との関連、3) パーソナリティ変数との関連、4) 個人が抱えている問題の深刻さ、症状との関連の4領域を明らかにした。就園時期の子どもの母親が園で関わる保育者にとる相談行動の規定因を検討する時、本研究では母親のパーソナリティ変数と抱える問題について注目する。水野他（1999）は上記の概観の中でパーソナリティ変数として自尊心、帰属スタイル、自己開示などを挙げているが、母親の自己に対する効力感や有能感は育児負担感やストレス認知の低減に影響を及ぼす要因であるとする研究結果がある（金岡, 2011；坂田他, 2014；渡辺・石井, 2009）。さらに、母親の全般的なパーソナリティを反映する自尊感情や有能感と、育児場面に限定して自己を評価する育児に関わる効力感や有能感は別のものである可能性が指摘されている（日下部・久保, 2013）ことから、本研究では育児コンピテンスを母親のパーソナリティ要因として取り上げる。

母親の育児コンピテンスに加え、悩みの認知や深刻さについても着目する。問題の深刻さや問題の多さは援助ニーズを高めるため援助要請を促進

するとする先行研究（本田・新井, 2010；笠原, 2004, 2006; Komiya, Good, & Sherrod, 2000; 永井・新井, 2007；中岡・児玉・高田・黄, 2011）が多いことから、本研究でも母親の悩みの多さや深刻さの認知を母親の相談行動を促進する要因として取り扱う。母親の悩みの内容について本研究では子どもの行動特性上の悩みに限定し、その定義にはStrengths and Difficulties Questionnaire（Goodman, 1997；以後SDQと略記する）を参考にした。

就園児の母親の保育者への相談行動、及び満足度

就園児の母親の保育者に対する相談行動の生起に影響を与える要因として、上述の母親の要因に加え第二の要因として、園の相談環境も取り上げる。保育者による保護者を対象とした育児相談はその役割が重要視されつつあるものの、すべての園で保護者に対する相談環境が整っているとは限らない。そこで、園の相談環境も母親が保育者への相談行動を促進する上での主要な要因の一つになるのではないかと考えた。第三の要因として、相談行動は対人的な関係性の中で生起すると考え、相談相手の要因に注目する。援助要請先として保育者は、フォーマルなサポート源と考えられ同年代の子どもをもつ母親などに比較し関係性への懸念は低い対象であると考えられるが、対話や相談に至る前に母親が保育者に抱く認知は相談行動の生起に影響を及ぼす要因の一つと考えられる。

また、ソーシャル・サポートについては量に加えて質の面の重要性が指摘されていることから（中村・高橋, 2013）、相談を行った結果の満足度に関してもその規定因を検討する必要がある。相談後の満足度の影響因について、笠原（2006）の研究では保育者の援助行動における「受容」と「助言や指摘」の2因子が特定され、この両者が母親の相談満足度を増加させていた。本研究でもこれらの側面に着目する。

目的

本研究では就園児をもつ母親の保育者への相談行動の頻度とその結果としての満足度について、これまでの援助要請行動研究の知見を参考に1) 母親自身の要因、2) 相談環境の要因、3) 相談相手（保育者）の要因から検討した（Figure 1）。仮説は以下の通りであった。（1）母親の育児コン

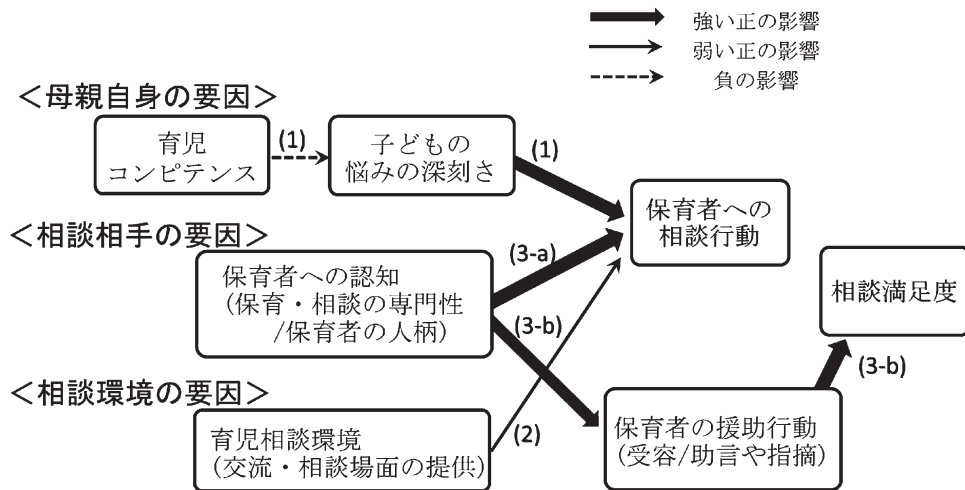


Figure 1 概念図

ピテンスの低さは子どもへの悩みの多さ、深刻さを増加させ、保育者への相談行動が増加するだろう。(2) 相談環境の要因として、園の育児相談環境の充実が保育者への相談行動を促進するだろう。(3) 相談相手の要因としては、a) 母親の保育者への肯定的認知は保育者への相談行動を促進するだろう。また、b) 母親からの肯定的認知の高い保育者は有効な援助行動をもたらす、母親の相談満足度が増加するだろう。

これらの仮説検証を通じて、母親の保育者への相談行動や満足度の現状と、それらを規定する構造について明らかにする。また、母親の就園児期の子どもの悩みの現状についても明らかにし、園による育児支援のあり方について検討したい。先行研究ではこれらの要因の検討について、保育園を中心に多く研究されている(笠原2004, 2006)が本研究では幼稚園にも対象を広げ、幼稚園と保育園を一元的に捉え、その異同についても合わせて検討していく。

方法

調査対象者 対象者は東京都内の幼稚園、保育園に通う園児を持つ保護者223人であった(回収率48%)。調査への同意が得られた211人(幼稚園118人、保育園93人)の母親を分析対象とした。調査は匿名で行い、また調査への協力は任意であった。

調査期間 2016年6月～7月

調査手続きと倫理的配慮 調査の趣旨に賛同の得られた東京都内の幼稚園2園、保育園4園に調査の協力を依頼した。3歳児、4歳児、5歳児クラス在籍の園児全員の保護者、計469人(幼稚園287人、保育園182人)に対して質問紙と返信用封筒を同封したセットの配布をお願いし、質問紙の回収は保護者より大学への直接郵送により行った。本研究は、昭和女子大学倫理審査委員会の承認を得て行った(2016年5月6日承認、承認番号16-16)。

調査内容 質問紙は以下の尺度、および調査対象者と子どもの属性についての質問項目で構成した。

1. **子どもの行動特性上の悩み尺度** Goodman (1997) のSDQ 3～4歳児親用をもとに5項目を作成した。SDQは「情緒」「行為」「多動・不注意」「仲間関係」「向社会性」の5つの下位尺度で構成されるが、本研究では上記の下位尺度を参考に5項目を作成し使用した(Appendix 1)。質問紙の教示は「これまでお子さんを育ててきた中で、次のことがらについて、あなたはどれくらい悩んだことがありますか、ありませんか。悩んだことがある場合は一番悩んでいた頃を思い出して、その頃のあなたに最もあてはまる番号ひとつに○をつけてください」とした。
2. **保育者への相談行動尺度** 上記の悩み項目、5項目ごとに、①送迎時の対話(以後、送迎時相談)、②連絡帳での相談(以後、連絡帳

相談)、③個別相談別に質問し、評定は「相談しなかった(1)」から「よく相談した(5)」の5件法を用いた。

3. **相談満足度尺度** 上記の悩み項目、5項目を質問し、評定は「全く満足しなかった(1)」から「非常に満足した(7)」の7件法を用いた。
4. **保育者への認知尺度** 笠原(2004, 2006)をもとに作成した(項目例「1.子どものことや子育てに関して悩んでいる親の相談に応じてくれた」「2.身近な存在に感じられた」等)。質問は12項目で評定尺度は「そう思わない(1)」から「そう思う(5)」の5件法を用いた。
5. **育児相談環境尺度** 笠原(2004, 2006)をもとに作成した(項目例「1.手紙や連絡帳などで、日頃から子どもの様子を教えてくれた」「2.先生に相談しようにも、先生が忙しそうで声をかけられなかった(逆転項目)」等)。質問は5項目で評定は上記と同じ「そう思わない(1)」から「そう思う(5)」の5件法を用いた。
6. **保育者の援助行動尺度** 笠原(2004, 2006)をもとに作成した(項目例「1.悩みを最後まできちんと聴いてくれた」「2.相談した結果、迷っている不安や気持ちを整理できた」等)。質問は12項目で評定は上記と同じ「そう思わない(1)」から「そう思う(5)」の5件法を用いた。
7. **育児コンピテンス尺度** 奈良間他(1999)の日本版Parenting Stress Indexの『親としての

有能さ』因子7項目を用いた。

結果と考察

各変数の信頼性分析および記述統計量

先行研究で複数因子構造が確認されていた「保育者への認知尺度」「保育者の援助行動尺度」について因子分析(最尤法)を行ったところ、いずれも1因子構造が確認された。先行研究とは一致しない結果となったが、本研究では1因子として合計した。また、「育児相談環境尺度」「育児コンピテンス尺度」については主成分分析をおこなったところ、1因子構造が確認されたため、こちらも1因子として合計した。各尺度について内的一貫性を検討するためにChronbachの α 係数を確認し、それぞれの合計値を各得点とした。各尺度の信頼性係数は以下の通りであり、おおむね許容範囲であった。(1.子どもの行動特性上の悩み尺度： $\alpha = 0.72$ 、2.保育者への相談行動尺度： $\alpha = 0.87$ 、3.相談満足度尺度： $\alpha = 0.79$ 、4.保育者への認知尺度： $\alpha = 0.93$ 、5.育児相談環境尺度： $\alpha = 0.65$ 、6.保育者の援助行動尺度： $\alpha = 0.95$ 、7.育児コンピテンス尺度： $\alpha = 0.82$)

各変数の記述統計量をTable 1に示す。就園状況別の比較において、幼稚園群、保育園群を独立変数、各尺度得点を従属変数として t 検定を行ったところ(Table 1)、相談満足度、悩み、育児コンピテンス、保育者への認知、保育者の援助行動の平均値には群間に有意差は見られなかったが、相談行動合計($t(109) = 4.78, p < .01$)、育児相談環境($t(201) = 2.55, p < .05$)に群間で有意差が

Table 1 各尺度の基礎統計量と t 検定の結果

	合計 $n = 211$		幼稚園群 $n = 118$		保育園群 $n = 93$		t 値	(df)	得点 範囲
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD			
相談行動合計	22.41	6.99	19.43	4.12	24.67	7.86	4.78**	(109)	15~55
相談満足度	22.11	3.15	21.88	2.55	22.42	3.80	1.16	(144)	5~35
悩み	16.77	5.75	16.81	6.00	16.71	5.43	-0.11	(207)	5~31
育児コンピテンス	18.16	4.95	17.93	4.68	18.46	5.28	0.76	(200)	7~32
保育者への認知	45.35	9.08	44.43	9.18	46.55	8.86	1.63	(196)	15~60
保育者の援助行動	42.70	9.81	42.84	9.75	42.52	9.93	-0.22	(196)	13~60
育児相談環境	14.93	3.85	14.32	3.90	15.70	3.67	2.55*	(201)	5~25

* $p < .05$, ** $p < .01$

認められ、ともに保育園群で高くなっていた。

母親の悩みの現状

どの内容の悩み項目に関しても「どちらとも言えない」と回答した母親は4.3%から9.0%と少なく、子どもの問題を特定した時、そのことについて悩んだかどうか意識化できている母親が多いことが示された。また多くの母親にとって「子どもの気になる問題行動」のように共通した悩みがある一方（「非常に悩んだ」から「悩んだことがある」合計：55%）、「落ち着きのなさ」「不安・消極性」「仲間関係」「コミュニケーション・発達上の心配」に関する悩みについては、「全く悩まなかった」から「あまり悩まなかった」を合わせた、悩んだ経験の少ない母親がそれぞれ63%、66%、56%、66%と過半数を占める一方、悩んだことがあると回答した母親も20%前後おり、悩みの経験度合いに個人差があることがわかった。さらには個別の悩み項目間には程度の違いはあるもののすべての関係で有意な正の相関がみられたことから（ $r_s = .21 \sim .58$ ）、子どもの特定の問題に悩む母親は他の問題の悩みも抱えやすい傾向がうかがわれる。一方、母親や子どもの属性と悩みに関する検討においては、男児の母親が「コミュニケーション・発達上の心配」を多く認知する傾向があること（ $M_{男} = 3.40, M_{女} = 2.79, F(1, 202) = 5.79, p < .05$ ）、また子どもが一人の母親は複数児の母親より一般的に悩みを多く感じていること（ $M_{一人} = 4.40, M_{複数} = 3.86, F(1, 205) = 5.34, p < .05$ ）が明らかになった。

これらの結果から子育て学習会、保護者へのニュースレターなど多くの母親を対象とした情報提供の内容としては、「かんしゃく」「うそをつく・言い訳をする」「いけないとわかっていることをわざとする」「待っててなどの指示に従えない」など、共通の悩みに対する対処法や発達理解を促す心理教育などが有効と考えられる一方、個人差のある悩みについては、個別の相談やテーマを絞った勉強会やペアレント・トレーニングなどで扱っていくことが有効ではないかと考える。

またきょうだい児の有無の影響について先行研究では、きょうだい児への対応困難感が育児困難感を高める（坂田他, 2014）、子どもが二人以上いると育児負担感が高くなる（荒牧・無藤, 2008）、第二子またはきょうだい数が二人以上の母親は

「不機嫌・怒り」のストレス反応が高くなる（湯浅・櫻田・小林, 2006）とする結果と、「1人×男児」群において育ちへの不安感が高くなる（荒牧・無藤, 2008）、第一子やきょうだい数が一人の母親は「混乱」の被援助志向性が高い（湯浅・櫻田・小林, 2006）、子育ての戸惑いが二人目で縮小する（加藤, 2005）とする両者の結果があるが、本研究では子どもの悩みを育児上の不安や混乱と読み取ることもでき、後者の結果を支持する内容となった。これらの結果からとりわけ一人っ子や第一子の母親に対しては、育児経験の不足からくる心配や悩みを軽減するような関わりが育児支援の現場に求められるのではないかと考える。

保育者への相談行動

群間の比較においては、保育園では幼稚園に比較し保育者への相談行動が多かった（Table 1）。相談形態別に見ると、個別相談では両群に有意差はなく、送迎時相談（ $M_{保育園} = 8.28, M_{幼稚園} = 6.39, t(145) = 5.09, p < .01$ ）、連絡帳相談（ $M_{保育園} = 8.07, M_{幼稚園} = 5.32, t(102) = 7.26, p < .01$ ）で保育園群が有意に多くなっていた。これは加藤（2005）の育児期の母親の被援助志向性の研究結果で保育園利用の有職の母親は保育園を援助要請先と認識しているが幼稚園利用の育児専門の母親は幼稚園をその対象と認識していないとする結果とも一致しており、また相談形態の背景には送迎の方法や連絡帳の位置づけの両園での差異が影響しているものと思われる。

Amos Ver.24.0を用いた共分散構造分析の結果、相談行動の増加に影響を及ぼす要因としては、母親自身の要因・相談環境の要因・相談相手の要因の枠組みでは、母親自身の要因が重要であることが明らかになった（Figure 2）。幼稚園、保育園の就園状況別に多母集団同時分析を行った結果、モデルの適合度指標は $\chi^2(26) = 38.96, p < .05$, CFI = .97, RMSEA = .05であり、十分な適合度が得られた。

幼稚園群、保育園群共に育児コンピテンスが低い人ほど悩みが増加して保育者への相談行動が多くなるという関係が明らかになり、仮説（1）は支持された。この構造は自尊感情の低い人は援助を求めることでさらに傷つくことを恐れて援助を求めないとする「傷つきやすさ仮説；vulnerability hypothesis」（Nadler, 1998）に一致しない結果と

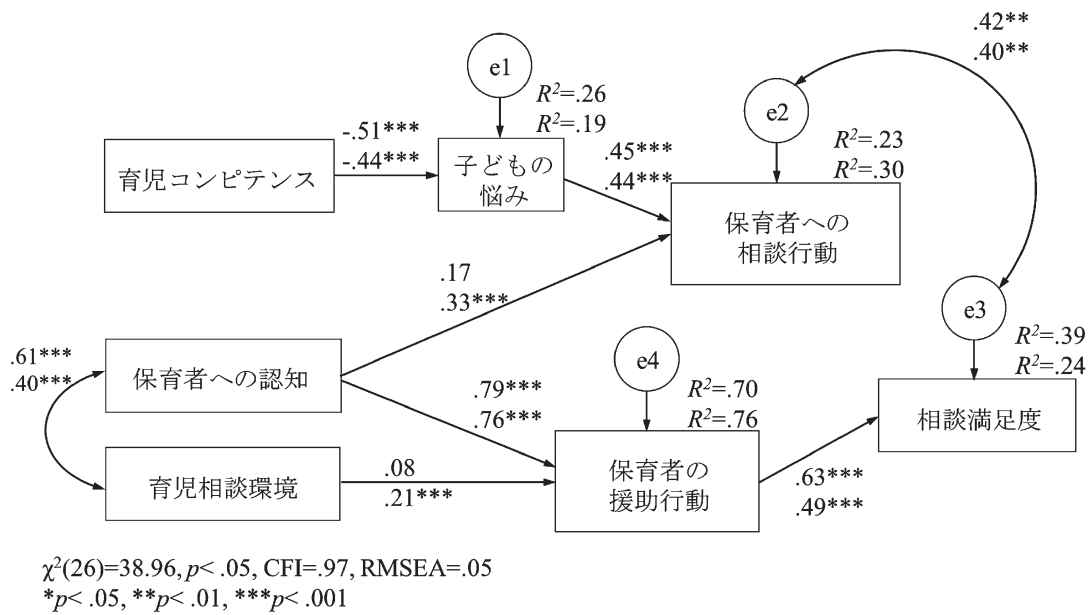


Figure 2 多母集団同時分析の結果

上段：幼稚園群 (n = 118)、下段：保育園群 (n = 93)

なったが、母親の全般的なパーソナリティを反映する自尊感情と、育児場面に限定して自己を評価する育児コンピテンスは別である可能性を考慮すると、保育者への相談行動に関しては育児をする母親としての有能感の低さは相談行動や被援助志向性を抑制する要因にはなっていないことが示唆された。これらのことから、母親への相談・援助をする立場の者は、子どもの問題行動や育てにくさという現象やその解決策に焦点を絞った対応をおこなうことで、母親自身の全般的な自尊感情や自己効力感を脅かすことなく同時に支えながら、母親の子どもの問題行動対処への動機づけを促進するような関わりが可能ではないかと考える。

一方、相談環境の要因については、両群共に相談行動への有意なパスは見られず (Figure 2)、また第三の相談相手の要因である保育者への認知については保育園のみで相談行動への有意なパスが確認された (Figure 2)。このことより仮説 (2) は支持されず、仮説 (3-a) は一部支持された。育児相談環境と保育者への認知には両群共に高い共変関係がみられたことから、就園児の母親は相談相手と相談環境を含んだ大きな枠組みとして相談環境ととらえている可能性が考えられる。また、保育者との接触機会の多い保育園では保育者への認知も相談行動に影響を及ぼす要因となり得るこ

とが示唆されているものの、幼稚園と保育園に共通した母親全般に言える要因とはなっておらず、詳細なエビデンスについては今後さらに詳しく検討していく必要があるものと考えられる。

相談満足度 相談満足度の高さについては幼稚園群、保育園群の群間に有意差は見られなかった。パス解析の結果からは、母親からの肯定的認知の高い保育者は母親が相談した際、有効な援助行動をもたらし、母親の相談満足度が増加することが幼稚園、保育園群共に示され (Figure 2)、仮説 (3-b) は支持された。

相談満足度の増加に関連する個別の項目を検討するため、保育者の援助行動の各尺度項目を説明変数とし、個別の悩み別相談満足度を目的変数とする重回帰分析 (ステップワイズ法) を行った結果からは、親とは違った見方、実行しやすいアドバイス、情報や解決策などの具体的で実行可能な助言や、専門家としての視点からの助言といった内容の援助行動が保育者に求められていることが示唆された (Table 2)。また保育者への相談行動と相談満足度の間には幼稚園、保育園共に中程度の相関関係があり、保育者への相談行動が多い母親ほど相談満足度が高く、また相談した際の満足度の高さが新たな相談行動を生起させるといった関係が成り立つのではないかと考えられる。

Table 2 悩み別相談満足度を目的変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）

説明変数	目的変数：悩み別相談満足度				
	子どもの 気になる 問題行動 <i>n</i> = 196	落ち着き のなさ <i>n</i> = 196	不安・ 消極性 <i>n</i> = 195	仲間関係 <i>n</i> = 196	コミュニケー ション・ 発達上の心配 <i>n</i> = 196
5 先生のアドバイスによって、悩みや不安が解消した	.35***	.27***	.27**	.41***	-
7 どう行動したらよいか、こちらが実行しやすいアドバイスだった	-	-	-	-	.40***
8 親とは違った見方を教えられた	-	.23**	-	-	-
9 一緒に考えるという姿勢が感じられた	-	-	.18*	-	-
10 一般論ではなく、こちらが必要とする情報や解決策を与えてくれた	.22*	-	-	-	-
<i>R</i> ²	.28	.18	.17	.17	.16
調整済み <i>R</i> ²	.27	.17	.16	.16	.16

p* < .05, *p* < .01, ****p* < .001

総合考察と展望

本研究によって就園時期の子どもを持つ母親が子どもの行動特性について悩んだ時、園の保育者にどのように相談行動をとり、またその時の満足度がどのように規定されているかについて、その背景の一部が明らかになった。悩みの内容にも共通する悩みと悩み経験に個人差のある内容が明らかになり、育児支援や子どもの発達理解を促す心理教育のテーマ設定や相談形態を考える上での指針になるものと思われる。また相談行動が生起する背景としては母親自身の要因が最も影響が大きく、育児コンピテンスの低い母親ほど子どもの悩みが増加し保育者への相談行動が増加するという構造が明らかになった。その結果他の個人的な心理相談などとは異なり相談に対する抵抗や躊躇は限定的と考えられ、育児に自信が持てず子どもの行動に悩みがあるときには、母親は比較的抵抗が少なく保育者に相談している姿がうかがえる。そのような状況下で保育者に求められる相談対応としては、悩み・不安が解消するアドバイスや実行しやすいアドバイス、専門家として親とは違った見方や情報などの提示であり、園としての相談機能を向上させていく上で、また園の巡回指導時の保護者対応の指導ポイントとして活用できる知見

ではないかと考える。

最後に本研究の問題点と今後の課題として、第一にサンプルの偏りによる再現性への課題を挙げる。調査の趣旨や研究の意義については理解を示されたものの、保護者への負担や保護者との関係性におけるリスク配慮から調査への協力については慎重な園も多かった。結果として、調査協力への承諾を頂いた比較的小規模の園でのアンケート調査実施となったため、今後はこども園など大規模な園も含んだ調査が望まれる。

第二の問題点として本研究では母親に一番悩んでいた頃を想起してもらい回答を得る方法をとったため、相談する前後の保育者に対する認知が未分化になった可能性が考えられる。相談前後の認知の変容を的確に捉える試みとしては、直前に悩み相談を経験した対象者に絞った分析をする、教示の方法として相談前後の認知であることを強調するなどの工夫が必要と思われる。

引用文献

荒牧美佐子・無藤 隆 (2008). 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対象に 発達心理学研究, 19, 87-97.

- Goodman, R. (1997). The Strengths and Difficulties Questionnaire: A Research Note. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, 38, 581-586.
- 本田真大・新井邦二郎 (2010). 幼児をもつ母親の子育ての悩みに関する援助要請行動に影響を与える要因の検討 カウンセリング研究, 43, 51-60.
- 金岡 緑 (2011). 育児に対する自己効力感尺度 (Parenting Self-efficacy Scale : PSE 尺度) の開発とその信頼性・妥当性の検討 小児保健研究, 70, 27-38.
- 笠原正洋 (1999). 保育者による育児相談への保護者の意識 保育学研究, 37, 191-199.
- 笠原正洋 (2004). 保育園児の保護者が子育ての悩みを保育士に相談することに何が関わっているのか 中村学園大学短期大学部研究紀要, 36, 25-31.
- 笠原正洋 (2006). 園の保護者による保育者への援助要請行動—満足度及び援助要請意図の関連— 中村学園大学短期大学部研究紀要, 38, 19-26.
- 加藤道代 (2005). 子育て期の母親における「被援助性」とサポートシステムの変化 (1) 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 54, 353-370.
- Komiya, N., Good, G. E., & Sherrod, N. B. (2000). Emotional openness as a predictor of college students' attitudes toward seeking psychological help. *Journal of Counseling Psychology*, 47, 138-143.
- 日下部典子・久保義郎 (2013). 育児ストレスにセルフエフィカシーがおよぼす影響 (1) 福山大学こころの健康相談室紀要, 7, 63-71.
- 水野治久・石隈利紀 (1999). 被援助志向性, 被援助行動に関する研究の動向 教育心理学研究, 47, 530-539.
- Nadler, A. (1998). Relationship, esteem, and achievement perspectives on autonomous and development help seeking. In Karabenick, S. A. (Ed.), *Strategic help seeking: Implications for learning and teaching* (pp.61-93). Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates.
- 永井 智・新井邦二郎 (2007). 利益とコストの予期が中学生における友人への相談行動に与える影響の検討 教育心理学研究, 55, 197-207.
- 中村鮎美・高橋道子 (2013). 母親の育児ストレスに関連する要因と精神的健康—育児へのサポートに着目して— 東京学芸大学紀要, 64, 259-266.
- 中岡千幸・児玉憲一・高田 純・黄 正国 (2011). 大学生の心理カウンセラーへの援助要請意図モデルの検討—援助要請不安, 援助要請期待及び援助要請意図の関連— 広島大学心理学研究, 11, 215-224.
- 奈良間美保・兼松百合子・荒木暁子・丸光 恵・中村伸枝・武田淳子・工藤美子 (1999). 日本版 Parenting Stress Index (PSI) の信頼性・妥当性の検討 小児保健研究, 58, 610-616.
- 坂田 祥・成瀬 昂・田口敦子・村嶋幸代 (2014). 幼児の行動特性別にみた母親の育児困難感とその関連要因 日本公衆衛生雑誌, 61, 3-15.
- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島 悟・北村俊則 (1994). 育児に関するストレスとその抑うつ重症度との関連 心理学研究, 64, 409-416.
- Srebnik, D., Cause, A.M. & Baydar, N. (1996). Help-seeking pathways for children and adolescents. *Journal of Emotional and Behavioral Disorder*, 4, 210-220.
- 渡辺弥生・石井睦子 (2009). 乳幼児を持つ母親の育児ストレスにソーシャルサポートおよび自己効力感が及ぼす影響について 法政大学文学部紀要, 60, 133-145.
- 湯浅京子・櫻田 淳・小林正幸 (2006). 育児相談の被援助志向性に関する研究—ストレス反応と保健師に対する被援助バリアの視点から— 学芸大学教育実践研究支援センター紀要, 2, 9-18.

謝 辞

本研究にご協力頂いた保護者の皆様ならびに幼稚園、保育園の先生方に深く感謝いたします。

Appendix 1 子どもの行動特性上の悩み尺度項目

項目	具体的な内容
1 子どもの気になる問題行動	カッとなったりかんしゃくをおこす・うそをついたり言い訳をする・いけないとわかっていることをわざとする・待っててなどの指示に従えない等
2 落ち着きのなさ	気が散りやすく、注意を集中できない・じっとしてられない等
3 不安・消極性	心配性・いつも不安そう・SOSが出せない・あいさつが言えない等
4 仲間関係	友だち、きょうだい児とのトラブル・遊びのルールが守れない等
5 コミュニケーション・発達上の心配	語彙が少ない・ことばの発達や運動能力に気がかりがある・身辺自立〈着替え・トイレなど〉に心配がある等

たかぎ のりこ (発達支援研究所プラウト)
いまじょう しゅうぞう (昭和女子大学大学院生活機構研究科)